

婚姻と家族の民俗的構造

八 木 透

一 序説——通過儀礼としての婚姻研究の問題点

人はその一生の中で様々な儀礼を経験する。その多くは、当人をめぐる社会関係が大きく変化する機会に行なわれる。民俗学でいう、いわゆる通過儀礼（あるいは人生儀礼）とは、基本的にはそのような性格を持つものである。数多くの儀礼の中で、特に重要な意味を持ち、かつ盛大に行なわれるのは、誕生・婚姻・死に際して行なわれる儀礼である。これらは家族、あるいは村落などの当該諸集団にとって、その構成員がもっとも大きく変化する機会である。

ゆえにその儀礼も、盛大に取り行なわれるのである。しかし、誕生と死に際して行なわれる儀礼では、その中心となる者の意識の外側で行なわれることになり、いわばある人物を取り巻く社会関係の変化に伴って、回りが主催する儀礼としての意味を持つ。婚姻に際してもある程度は同様のことがいえようが、少なくとも当人の意志を、多かれ少なかれ反映して行なわれるという点で、他のふたつの儀礼とはその性格を若干異にする。さらに、誕生と死に際して行なわれる儀礼では、靈魂観や他界観、あるいは人間の「命」に関わる意識と深い関連を持ち、そのために、儀礼においても宗教的・呪術的行為が多くを占めるといふ特徴が見られる。その点、婚姻の儀礼においては、そのような行為

は皆無ではないが、他との比較においては少なく、その分当人をめぐる社会的人間関係を再認識することを目的とした儀礼が中心となる。よってこれまでの民俗学的研究においても、誕生と死をめぐる通過儀礼研究と、婚姻をめぐる通過儀礼研究とは、おのずからその研究視角が若干異なるという傾向が見られた。

柳田國男を中心とした伝統的な民俗学研究においては、日本人の「カミ(神)」意識や潜在的心意の問題を重要視する傾向があったために、通過儀礼研究においても、誕生と死の儀礼に関しては、これまで多くの成果が残されてきたが、それに比べて婚姻に関する研究はやや遅れ気味の観がある。これは婚姻の、儀礼としての特殊性にも原因があるが、伝統的な民俗学の歴史指向ともいえるべき基本的研究姿勢とも関わる問題であるように思われる。すなわち、柳田國男を中心とした初期の民俗学研究者が、その研究目的を、それまであまり注目されることのなかった日本の常民の生きざまを歴史的に描き出すこと、常民の過去を知ることによって起きているように思われる。日本の各地域から寄せられた様々な民俗事象を、「重出立証法」という特殊な比較論によって分析し、その結果、各事例の新旧を判断することによって歴史的変遷の過程を探ることに重きをおいてきたのである。そうして提示されたのが、それぞれの民俗事象の変遷過程であり、歴史であると結論された。通過儀礼においても、誕生・婚姻・死のそれぞれの儀礼をめぐる習俗・慣行の歴史的変遷が強調され、そのために、諸事例を集めて類型化する作業が行なわれた。しかし、誕生と死をめぐる儀礼においては、個々の習俗・慣行の歴史的変遷と同時に、呪術的な儀礼行為そのものの意味が問題とされ、その解釈をめぐる様々な議論が展開された。しかし婚姻においては、一部の研究を除けば、歴史的変遷を示すための類型化と、それに基づく儀礼そのものの意味論を中心とする研究が多数を占めてきたように感じられる。ゆえに、その後の研究者たちが発展的に研究を継承する場合も、従来からの類型論とその背景にある解釈に依拠せざるをえなかった所に、研究の遅延の一つの原因があるように思われる。

二 民俗学における婚姻研究の回顧と課題

民俗学における婚姻研究の幕開けは、何といっても柳田國男の著作である「簪入考」であろう。ここにおいて柳田は、簪入りをもって開始される婚姻が嫁入りをもって開始される婚姻より古い形態のものであるという見解を提示した⁽¹⁾。いわゆる基本的解釈としての婚姻の変遷論がここに確立されたのである。しかしこれは昭和四年（一九二九）という、民俗学においてはまだ萌芽期に書かれた論文であり、「史学対民俗学の一課題」という当時の副題にも示されている通り、柳田の意図は従来の文献中心の歴史学に対する批判を提示することにあった。しかし日本の婚姻の諸形態を、歴史的前後関係において把握せんとする基本的な研究視角は、きわめて大きな影響力をもち、戦後の婚姻研究の大枠を決定することになったのである。

柳田が「簪入考」において使用した、婚姻開始の儀礼である「簪入り」・「嫁入り」という語が、後に大間知篤三と有賀喜左衛門によって「簪入婚」・「嫁入婚」という婚姻類型を示す名称とされ、その後の婚姻の二大類型論として定着するのである。

柳田以後、何人かの研究者によって婚姻をめぐる研究が進められてきたが、中でも特筆すべきは瀬川清子、大間知篤三、有賀喜左衛門、江守五夫などによる一連の研究であろう。

瀬川清子は『婚姻覚書』、『若者と娘をめぐる民俗』の二冊の大作において、全国の膨大な事例をもとに、婚姻慣行や若者集団を中心とした総合的研究成果を残した⁽²⁾。事例の豊富さと対象地域の広さにおいては、瀬川の研究を越えるものは見当らない。ただ理論面においてはやや弱い点が多く、基本的には柳田の基礎概念を越えることはできなかったことが悔やまれる。

一方大間知篤三は、『婚姻習俗語彙』を柳田との共著で執筆して以来、精力的に婚姻をめぐる民俗研究を行い、そ

の結果柳田を越えんとする貴重な成果を残した。類型論に関しては、伊豆諸島の事例をもとに、新たに「足入れ婚」や「寝宿婚」という概念を導入した⁽⁴⁾。特に「足入れ婚」は従来の「簀入婚」から「嫁入婚」への歴史的移行の過渡期に位置づけられる婚姻として、その後はあわせて三大類型論として把握される傾向を持つものである。大間知は柳田の学説を基本的には継承しつつも、特に晩年には柳田の主張に対する批判的な問題提起を行なっている。すなわち「対馬のテボカライ嫁」や「富山県下の婚姻習俗——ツケトドケとウツチャゲ」などにおいて、伝統的な嫁入婚の存在を示唆し⁽⁵⁾、また「足入れ婚とその周辺」において、〈荷移しのおくれる嫁入婚〉〈仮祝儀嫁入婚〉〈奉公分の嫁〉〈傭い式嫁入婚〉などの、形式的には「嫁入婚」に属しうるにもかかわらず、実態としては一般的嫁入婚とは全く性格を異にする婚姻が多く存在することを紹介して、従来の類型論では日本の婚姻を正確に把握することは困難であるという独自の見解を提示している⁽⁶⁾。しかし何よりも、大間知の婚姻研究の意義は、婚姻を家族や隠居慣行との関連において捉え、柳田の歴史の変遷論をある程度肯定しつつも、婚姻を社会慣行として構造的・典型的に理解すべきだとする研究視角を示したことにあるといえる。これは後に上野和男も論じているように、日本の民俗文化を基本的に「一元的」に理解するか、「多元的」に理解するかという大きな問題にも関わるものである。

また有賀喜左衛門は、『日本家族制度と小作制度』や『日本婚姻史論』などにおいて、日本の家と同族集団を中心とする一連の研究より、類型論においては「親方取婚」という新たな類型を提示し、さらに村落構造や労働組織を中心とする独自の視点に基づき、婚姻を村や家によって統制されるべき社会関係として捉えんとする興味深い見解を示した⁽⁸⁾。なお「寝宿婚」については、寝宿と婚舎をめぐる理解の相違から、大間知篤三との間で論争を繰り広げているが、その詳細については拙稿「寝宿婚と婚舎をめぐる民俗研究——大間知・有賀論争の再検討」を参照されたい⁽⁹⁾。

また江守五夫は、過去の婚姻に関する一連の論文を集めた『日本の婚姻——その歴史と民俗』において、東アジアという広域を視座に入れた比較民族学の立場より、きわめて明晰に日本の婚姻を分析している⁽¹⁰⁾。特に、柳田以来定説

とされてきた、贅入婚から嫁入婚への変遷説に対して疑問を投げかけたことは大きな成果といえよう。すなわち以前にも大間知篤三や天野武などによって唱えられてきたように、⁽¹¹⁾北陸や対馬などの日本海沿岸地域においては、伝統的に嫁入婚が行なわれていたとする主張に対して、韓国や中国の婚姻習俗との比較によって、今まで以上に説得力ある分析を行なっているのである。さらに、日本の種々の婚姻習俗をアルタイ系文化、さらにはインド・ヨーロッパ系文化と連なるものとする見解を提示し、従来から検討の必要性を問われながらも、なおざりにされてきた多くの問題点を浮き彫りにしたことは、大きな意味をもつものと思われる。しかし江守の研究は、あまりにも習俗相互の文化的共通性と文化伝播のルートを追い求め過ぎたきらいがあり、その結果、習俗を支える背景としての社会構造や歴史的時代性の分析が、いささか疎かにされてしまったことが問題である。⁽¹²⁾

以上の他にも注目すべき成果として、蒲生正男や坪井洋文、さらに最近では清水昭俊や中込睦子などの研究があげられよう。特に清水昭俊は社会人類学の立場より、婚姻を「長期にわたる婚姻Ⅱ縁組Ⅱ世代交替の複合的な過程」⁽¹³⁾として捉え、大間知や瀬川が提示した一般的嫁入婚ではない中間的な婚姻（センタクガエリ・シュウトノツトメなどを伴う婚姻）を、生活の重複と家の連帯という視点からみごとに分析している。

これらの婚姻をめぐる研究史を概観してみても、「贅入考」以来約六十年間、柳田の学説を基礎としながらも、それを越えんとする斬新的な研究が多かれ少なかれ積み重ねられてきたことは確かである。しかし今日でも、柳田以来の婚姻の歴史の変遷説がさも定説であるかに使用され、類型論も「贅入婚」と「嫁入婚」の二類型、あるいは「足入れ婚」を含めた三類型が、もっぱら使用されているのが現状である。しかし、従来からの日本における婚姻の歴史の変遷説に対して、江守五夫をはじめとする多方面から批判が寄せられている今日、そこに依拠して構築されている類型論をそのまま適用して研究が進められるのは大いに問題があるといえはしないか。研究の方向性と視座が再検討されると同様に、類型論自体も再検討されるべきであろう。さらに近年の研究の成果として、日本各地域における膨大な

婚姻慣行やそれをめぐる習俗が報告されている中で、それらヴァリエーションに富んだ事例を正確に把握してゆくためには、新たな研究視角とそれを示すための類型論がどうしても必要であると思われる。さらに、類型の名称について、今日使用されているものは、すべて民俗語彙をそのまま使用したものばかりである。これまでの民俗学研究では、民俗語彙を重要視したために、実際の儀礼の名称がそのまま使用されるケースが多かったが、その結果、しばしば異種の婚姻慣行を、名称から判断して同一の範疇に含めてしまうという混同が生じている。¹⁶これらの諸問題の解決は、ただ婚姻研究においてのみならず、これからの民俗学のあり方を模索することにも繋がる重要な意味を蔵していると考えられる。

三 婚姻の形態と婚姻類型論

民俗学における婚姻研究の意義はどこに求められるべきであろうか。これまで、その歴史の変遷に重きが置かれてきたことは民俗学全体の風潮と、さらに民俗学自体の展開過程において当然のことかもしれない。しかし今後は、日本村落の社会構造、とりわけ家族や親族の構造との関連において婚姻を捉えてゆく必要性があると思う。清水昭俊は「近代のある地域に見られた特定の婚姻習俗を、ある仮想上の過去の時点に位置づけ、他の諸形態との歴史的前後関係を仮説的解釈として読み込んだとしても、問題とされている個々の習俗自体については、新たな理解が加わるわけではない。⁽¹⁷⁾（中略）仮に最終的には歴史的解釈が妥当だとしても、様々な婚姻形態の性格や意味を考察するために、一旦解釈の枠組（つまり歴史的解釈という枠組）を取り払い、各形態それぞれの内的一貫性を追求するという手順を踏まねばなるまい」と述べ、日本の婚姻慣行に対する社会人類学からのアプローチを試みている。清水の指摘の通り、少なくともこれからの民俗学における婚姻研究は、歴史指向を一旦取り払い、変遷論よりも、まず慣行や習俗自体の意味とそれを支える社会構造の解明に重きが置かれるべきであろう。

婚姻ととっても深い関連をもつのは家と家族の問題である。家や家族の構造によって、個々の婚姻の形態が決定されているといつても過言ではない。それならば、日本の家と家族の構造との関連で、婚姻を分析する必要がある。よつて、まずそのための指標となる新しい婚姻類型論について考えてみたい。なお、あらゆる民俗事象を類型化する前提には、必ず確固たる目的意識がなくてはならないことは周知のことである。筆者は従来の婚姻の歴史的変遷を明らかにするための安易な比較論を展開するためではなく、家や家族の構造理解のために婚姻を分析し、その実態と背後にある社会構造を把握するために類型化を行なうべきであると考えている。それは、婚姻をめぐる家族関係の変化の様子を捉えることによって、日本の家と家族の構造の特質を抽出することができるのではないかと思うからである。

従来の婚姻類型論では、類型化のメルクマールとして、婚姻開始の儀礼が行なわれる場所と儀礼の名称、および婚舎の所在のみが問題とされた。筆者は拙稿「民俗学における婚姻研究の課題」の中でも提示したように、¹⁸⁾類型化の基準として次のようなメルクマールを設定すべきであると考えている。

- (一) 婚出するのが男性、女性のどちらであるか。
- (二) 婚姻の相手が、当人たちの意志によって決定されるか、あるいは当人以外の者によって決定されるか。
- (三) 婚出者が自分の生家を出て婚家に加入するまでにどのような段階を経るか。また、その際にどのような儀礼が行なわれるか。

(四) 当面の婚舎はどこにおかれるか。また、婚舎は移動するか。

(五) 婚出者の移動終了後、その生家への依存度はどの程度のものか。

(六) 婚出者の移動終了後の家族構成は単世帯家族か、複世帯家族か。
(隠居制の有無)

以上のメルクマールに依拠して、日本の婚姻を構造的に分類すると、さしずめ次のような九類型が設定できる。

① へ一般型嫁入婚

女性が婚出する。婚姻の相手は主として男女双方の父親、もしくは親族の有力者によって決定される。当人同志は婚礼当日にはじめて顔をあわせることもある。婚姻開始の儀礼とともに、嫁は贅家に引き移り、同時に盛大な披露が行なわれる。その日から贅家が婚舎となり、その移動はない。嫁の生家への依存は希薄であり、嫁は引き移りと同時に婚家の家風になじむことが強要される。婚家では二世代の夫婦が同居し、基本的には隠居慣行は見られない。そのため嫁と贅の母親（姑）との間に緊張関係が生じ、嫁の忍従が家族関係維持のための条件となることが多い。場合によっては、嫁は使用人的な扱いを受けることもある。近世の武家社会における婚姻に端を発し、明治から戦前にかけて、都市部・農村部を問わず、日本の一般的社会において広く見られた家父長制的婚姻である。

なおこの類型には、大間知の報告にある「奉公分の嫁」や「傭い式嫁入婚」¹⁹⁾など、家父長制下における男尊女卑的な習俗も含まれるものとする。

②・③ 〈変則型嫁入婚〉（同居型・隠居型）

女性が婚出する。婚姻の相手は双方の父親や親族の有力者によって決定されることもあるが、当人同志の意志がある程度尊重されることもある。婚姻開始の儀礼とともに、嫁は引き移り、同時に盛大な披露が行なわれる。その日から贅家が婚舎となり、基本的には婚舎は移動しない。形態としては①の〈一般型嫁入婚〉と同じであるが、婚姻開始後の嫁の生家への依存が強く、嫁は主婦となる日にはじめて自分の荷を正式に贅家に移したり、それまでの間、長期かつ頻繁な嫁の里帰りの慣行が見られたりする。そのため①のような嫁と贅の母親との緊張関係は幾分緩和される。嫁が加入する家族は、単世帯家族の場合（②同居型）と、複世帯家族の場合（③隠居型）とがある。しかし後者の場合も、親子二世代の夫婦が同居を避けようとする厳格な規制や意識は見られないことが多い。

これは、北陸から若狭にかけての地域から報告されている、センタクガエリ・バン・ヒートリヨメなどと称される、長期のかつ頻繁な嫁の里帰り慣行や、²⁰⁾大間知の報告にあるような近江高島町の「荷移しの遅れる嫁入婚」²¹⁾、さらに佐

藤光民の報告にある山形・新潟県境地方のシュウトノットメ慣行⁽²²⁾などが含まれる。

④ 〈別世帯型嫁入婚〉

形態としては女性が婚出する。原則として当人同志の自由意志によって婚姻が決定するが、見合いや第三者の紹介がそのきっかけとなることもある。婚姻開始の儀礼は形式的な宗教的儀式を伴うことが多く、その儀礼も、双方の家以外の、いわゆるホテルなどの公共施設において行なわれることが多い。また、婚姻開始儀礼と同時に、盛大な披露が行なわれる。婚舎は双方の「家」を超越した新たな場所におかれることが多く、原則的には新夫婦による別世帯が形成される。また、両親との形式的な同居の形をとることもある。婚姻後の嫁の生家への依存は流動的かつ不規則で、表面上は嫁入りの形をとりながらも、実際は嫁家の近くに新居としての婚舎がおかれることもしばしばある。夫婦ともに「家」に対する帰属意識は希薄で、双方の両親とは家族としてのネットワークは保持しているが、事実上の家族としての機能を欠いているケースが多い。昭和以後今日にかけて一般化した都市型の婚姻で、故郷を離れて都市に住む者に多い形態である。

なお近年は、形式的には嫁入りの形をとり、夫婦が両方の苗字を名乗るにもかかわらず、実際は嫁家が準備した新居を婚舎としたり、嫁家で新夫婦が嫁両親と同居する形をとる場合もある。このような婚姻もとみえず④の類型に含まれるものとするが、「別世帯型擬制的嫁養子取り婚」とでも称すべき別の類型を想定すべきかもしれない。

なお上野和男によれば、奄美諸島、特に奄美大島では「家族の超世代的連続を志向する家族イデオロギーは希薄⁽²³⁾」であるとし、古くから現代型の婚姻とそれに相応する家族形態が存在したという。よってそのような奄美の婚姻もこの類型に含めることとしたい。

⑤ 〈同居型一時的妻問い婚〉

女性が婚出する。婚姻相手の決定は基本的には当人同志に委ねられている。婚姻開始の儀礼は、嫁が嫁家を訪れて

茶や菓子を食べながら嫁の母親と談笑する程度のきわめて簡素なもので、この儀礼以後、しばらくの期間聶の妻間いが行なわれる。婚姻開始より嫁の聶家への引き移りまでには、嫁が聶家に接近するための儀礼を経て、その生活基盤の一部を聶家に移すケースもある。婚舎はじめは嫁家におかれるが、後に聶家に移動する。一般に嫁の生家への依存は大きく、これは嫁の移動終了後も継続される場合が多い。隠居慣行は見られず、基本的に新夫婦は最終的には聶の両親と同居する。

このような婚姻は、主として瀬戸内海の家島や奄美諸島の沖永良部島で見られる婚姻⁽²⁴⁾で、従来の類型では「聶入婚」として定義されていた婚姻形態の中の、隠居慣行を伴わない形式の婚姻である。このような婚姻においては、妻間い婚存続の背景として、経済的な要因も親子二世代の夫婦が同居を避けようとする意識も、顕著には見られず、いわば嫁の移動によって生じる家族間の緊張関係を、いくつかの儀礼を経て嫁を徐々に聶家の家族へと接近させることによって、緩和しようとする傾向がうかがえる。

⑥・⑦ 〈隠居型一時的妻間い婚〉（嫁家中心型・聶家中心型）

女性が婚出する。形態は⑤の同居型一時的妻間い婚と同じであるが、ここでは親子二世代の夫婦が同居を避けようとする意識が強く、その結果、隠居慣行が見られる場合を指す。⑥の嫁家中心型は、いわゆる婚姻開始の儀礼が嫁家を中心として行なわれるもので、これは従来の「聶入婚」の隠居慣行を伴う形式の婚姻である。また⑦の聶家中心型は、婚姻開始の儀礼が聶家を中心として行なわれるもので、従来の「足入れ婚」に相当する婚姻である。これらはいずれも、嫁の生家への依存は非常に強く、それは終生維持されることが多い。

なおこれら二類型の婚姻においては、一時的な妻間いが行なわれるのであるから、当然婚舎は嫁家から聶家に移動するわけであるが、中には婚姻開始当初の婚舎が嫁家以外の場所におかれるケースもある。それはいわゆる「寝宿」が婚舎にあてられる場合である。たとえば伊豆諸島の利島では、初子が生まれるまでは娘のネドが婚舎にあてられる

が、それ以後は嫁家に移り、舅両親の隠居を契機として最終的には舅家に移される⁽²⁵⁾。このような婚舎が二段階にわたって変化する例は希であるが、当初寝宿が婚舎にあてられるという事例は、大間知篤三の報告によると、利島の他にも長門の見島や薩摩の甌島などで見られたという⁽²⁶⁾。このような「婚姻開始当初の婚舎の所在」を基準として考えれば、⑥・⑦の類型がそれぞれ「嫁家婚舎型」と「寝宿婚舎型」に二分類されることになる。さらに、見島のように嫁が舅の宿へ通うというケースもある。これなどは、舅が妻のもとに通うわけではないので、厳密には「妻問い婚」とはいえないことになるが、このような例は特例として、同一類型に含まれるものと考えたい。

いずれにしても、ここでは二世代の夫婦が同居を避けようとする意識が顕著に見られる点と、さらに「寝宿」のようなく家々とは次元の異なる場所に婚舎がおかれるという点がこの婚姻の大きな特色である。

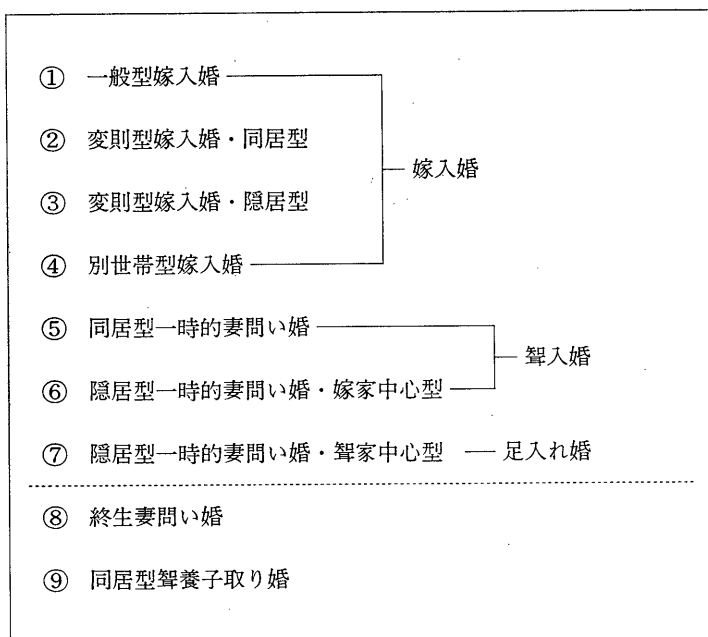
⑧ 〈終生妻問い婚〉

嫁が婚姻後、終生自家に舅を迎えるという、特殊な婚姻である。婚姻の相手は当人同志の意志で決定されることもあるが、第三者によって決定されることもある。婚姻開始の儀礼や披露が明確な形で行なわれることがない。実質は夫婦であるが、表面的には内縁関係に相当し、生まれた子は戸籍上は私生児と見做されて、嫁家の子として育てられる。飛驒の白川村の大家族村落において、嗣子とその妻となる女性以外の者の間にのみ見られた婚姻である⁽²⁷⁾。

⑨ 〈同居型舅養子取り婚〉

男性が婚出して嫁の家に入る形式で、①の〈一般型嫁入婚〉と同様に家父長制下における婚姻である。家に跡取りの男子がいけない場合、外から男子を舅養子として迎え、家業や家督を継がせる場合に行なわれる。ただし、近年に見られるような、嫁家が新居を準備し、形式は嫁入りの形をとりながらも、実際には舅に嫁家の家業を継がせるという擬制的な婚姻は、既述したように、④の〈別世帯型嫁入婚〉の範疇に含まれるものとしたい。

以上の九類型の婚姻と、従来の婚姻類型の対応関係を示したのが「図1」である。これを見ても明らかなように、



〔図1〕 婚姻類型一覽

従来一般に「嫁入婚」と称せられてきた婚姻は、内容的にきわめて多岐におよんでおり、家父長制的要素の濃い婚姻やシュウトノツトメの習俗を伴うような婚姻から、さらには今日的な恋愛婚姻まで、すべて均一に「嫁入婚」として扱われてきたことがわかる。いくら名称よりも内容理解が肝心であるとはいえ、これではそれぞれの婚姻形態や習俗の持つ本来の意味や、地域における存在形態について考えてゆく際、様々な弊害が生ずる可能性がある。さらに妻問い婚においても、これまでの多くの報告では、婚姻の儀礼や習俗に関してはかなり詳細な記述がなされているにもかかわらず、その地域における家族制、特に隠居慣行の有無に關しては記述がなく、その結果、⑤・⑥・⑦のどの類型に属するものか、判断に困るような例も多い。同じ妻問いを伴う婚姻でも、最終的に二世代の夫婦が別世帯を形成するのか、同一世帯の中に吸収されるのかによって、妻問いという行為の持つ意味や存続の理由が大きく異なることは十分に

考えられよう。この問題は、儀礼や習俗そのものを重視するこれまでの民俗学研究の招いた、一つの弊害であるといわねばなるまい。

なお⑧の〈終生妻問い婚〉と⑨の〈同居型贅養子取り婚〉は、特別な状況において、特例的に見られる婚姻であり、その意味においては①から⑦までの婚姻とは質的に異なるものである。ゆえに他の類型と同列に位置づけることには問題があるかもしれないが、類型化そのものが最終目的ではなく、その作業を通じて、様々な形態を示す婚姻の構造的把握と、その基盤としての家族の特質を抽出することを目的とするため、今回はとりあえず他の類型と同列のものとして捉えてみたいと思う。

四 婚姻から見た日本家族の特質

本節では、前節で述べてきた日本の婚姻の諸類型より、婚姻の形態と不可分の関係にある、家族の構造について考えてみたい。

婚姻の諸形態による類型化の作業を通じて、次のような日本の家族の構造的特質が看取できると思われる。すなわち第一に、嫁、その子、さらには贅に対して、婚姻開始儀礼以後も、想像以上に嫁家が大きな影響力を持つこととである。特に嫁自身は、婚舎や居住形態、贅の妻問いの有無にかかわらず、婚姻開始以後相当長期間にわたって生家との密接な関係を保持してゆくという側面が見い出せる。それは、①から⑦までの類型の中で、①のへ一般型嫁入婚を除くすべての類型の婚姻に反映されている。これは、嫁に出した女性の労働力を婚姻以後もお確保しておくとうとする嫁家の要求や、隠居慣行に代表されるような、親子二世代の夫婦が同居を避けようとするような家族慣行とも深い関わりがあると思われるが、このような積極的な要求や意識が見い出せない地域においても、多かれ少なかれ、嫁の生家に対する依存が見られることは、日本の家族制の一つの特質として捉える必要があろう。たとえば、八丈島

などの南部伊豆諸島では、シュウトツトメもしくはシュウトミマイなどと称する、嫁家に対する種々の義務が嫁に課せられて⁽²⁸⁾いる。顕著な例としては、妻問いの期間中、嫁はいかに自分の仕事が多忙であろうと、嫁家からの要請があればその仕事の手伝いに出かけなければならないという慣行である。これなどは女性労働力としての娘以外に、その嫁の労働力までも嫁の生家が確保しようとするもので、東北の「年期嫁」を彷彿とさせるものである。このような嫁の労働的義務が存在しない場合でも、島の男たちは、今日でもことあるたびに嫁家を訪れ、シュウト（嫁から見ても嫁の父を指す）に対する気配りを欠かさない。このような慣行は、単に労働力の確保という問題にのみ依拠しているものとは考えられない面がある。

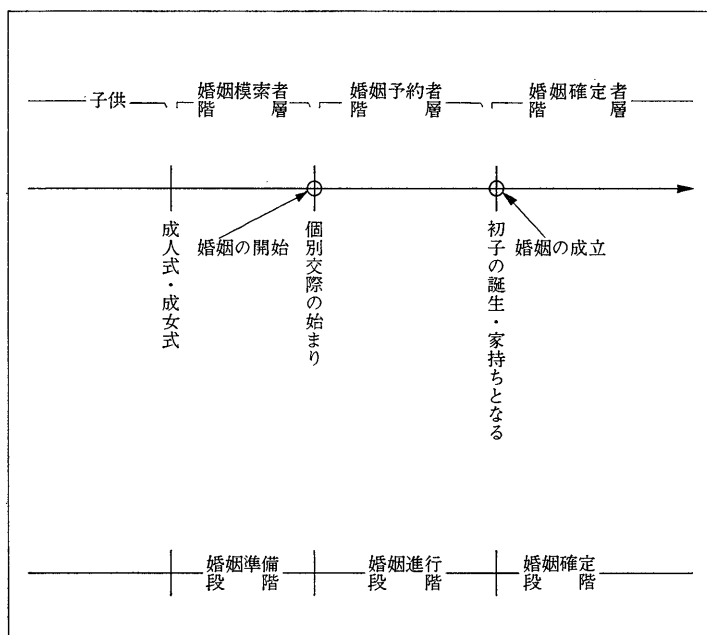
また既述した新潟・山形県境地方のシュウトノツトメにおいては、婚姻後の若夫婦が毎夜夕食後に連れだって嫁の生家を訪れる。これは義務などという性格のものではなく、特に決まった労働が定められているわけでもない。ただ嫁家の家族や、同じように嫁家を訪れて来る嫁の姉妹夫婦と、茶や酒を酌み交わして談笑するだけのもので、たとえ子ができて、その夫婦がシンショモチ（所帯持ち）になるまでは必ず続けられた⁽²⁹⁾という。この地方の婚姻は、形式的には嫁入婚で、隠居慣行の見られない地域であるが、その家族制は特異で、若夫婦は昼は嫁家の家族として行動するが、夕食後眠るまでの一定時間は嫁家の家族同然に振る舞うことになる。

また北陸地方から若狭湾周辺にかけて広く分布しているセンタクガエリ・バン・ヒートリヨメなどと称する、嫁の頻繁かつ長期にわたる里帰りの慣行も、さらに近江周辺の、婚姻後も嫁の荷を長期間にわたって生家に置き、必要に応じて里帰りを繰り返す慣行なども、先の新潟・山形地方のシュウトノツトメと同質のものとして捉えられる慣行である⁽³⁰⁾。これらの家族慣行の解釈については、清水昭俊と中込睦子がすぐれた分析を行なっている。清水はこれらの内、自分の荷を長く生家に留めておく慣習のみは「一般的嫁入り婚以外の婚姻形態に多かれ少なかれ随伴する要素」であると見做した上で、他の慣習について「若夫婦と家との関係は、一般に考えられているのとは異なって、決して

一義的ではなく、どちらつかずの両義的な性格を帯びたものであり、そのような若夫婦のあり方を「両属」とよんでいる⁽³¹⁾。さらにその解釈について「どの生活内容がいずれの家で営まれるかよりもむしろ、若夫婦の生活を多かれ少なかれ双方の家に分散することに重点があるように思われる」として、「両属の者を媒介とした家々の生活の重複とその連鎖」という、家の連帯⁽³²⁾の視点より分析している⁽³³⁾。このような清水の分析は、非常に理論的で明晰であり、基本的には筆者も氏の見解に賛同したい。

一方中込睦子は、福井県小浜市を中心とする地域の実態調査を行い、清水を含めた先学の理論を踏まえつつ、嫁の里帰りが終了する時期の分析より、「嫁の里帰りも単に嫁の地位が低かったから、あるいは嫁の労働力がきつかったから実家に依存せざるを得なかったというよりも、むしろ嫁が主婦として婚家に入るまでの期間を実家において待機していたとみるほうが妥当なのではないかとおもう⁽³⁴⁾」という見解を提示している。

筆者もこの問題について、拙稿「寝宿婚と婚舎をめぐる民俗研究」において、婚姻後の若夫婦のどちらつかずの立場（清水のいう「両属」を指す）を、「若夫婦の流動的な立場」として理解し、さらに年齢階梯制理論を応用した婚姻進行プロセスにおける「婚姻予約者階層」（婚姻進行段階）の期間に特有のものとする見解を提示した⁽³⁵⁾。すなわち「図2」のように、従来までの年齢階梯制研究における「青年独身者階層（未婚者）」から「中年階層（既婚者）」までの階層を、婚姻模索者階層（婚姻準備段階）・婚姻予約者階層（婚姻進行段階）・婚姻確定者階層（婚姻確定段階）という三区分として捉え、自由恋愛婚においては、男女が公然と個別交際を開始する時点を婚姻予約者階層のスタートと見做すと同時に「婚姻の開始」の時期と捉え、初子ができる、もしくは夫婦がそれぞれ戸主や主婦として婚家に定着する時期を婚姻予約者階層から婚姻確定者階層への移行の時期と見做すと同時に「婚姻の成立」の時点として捉えるという解釈である。そして、先のシュウトノツトメやセシタクガエリなどの慣行は、すべて筆者のいう婚姻予約者階層の期間に行なわれるのであり、婿家の母親、すなわち姑が死亡する、もしくはそれに匹敵する事態



〔図2〕 婚姻の進行プロセスと階層区分
(八木, 1987b より)

が生じた時には、嫁は嫁家の主婦として、ほぼ例外なく若夫婦は流動的な立場から、嫁家に帰属する立場へと移行するのである。その意味においては、たとえば対馬の例のように、普段着で嫁入り道具などほとんど持たずに嫁家に移った嫁は、初子の妊娠五カ月目に行なわれるハラマツリ(あるいはカネギトウ)とよばれる儀礼において、はじめて正式の嫁として認められ、かつ盛大な披露が行なわれるという婚姻形態も、形式こそ異なれ、シュウトノツトメなど同一の範疇で捉えられるものといえる。これはすなわち嫁が主婦となり、男女二人の関係が安定して名実ともに夫婦となるのがいつの機会かという差であって、ハラマツリの機会やシュウトノツトメが終了する機会、さらには伊豆諸島の〈隠居型一時的妻問い婚〉で妻問いが終了し、夫婦が嫁家に引き移る機会などは、ともに夫婦が婚姻確定者階層へ移行する時期であり、また「婚姻の成立」の時期である。これは婚姻

を「婚姻Ⅱ縁組Ⅱ世代交替の過程」と捉える清水の解釈においては、まさに最終の「世代交替」の時期に相当する⁽³⁷⁾。よって結論的には、清水・中込・筆者ともに、視点とその表現こそ若干異なるとはいえ、非常に似た解釈を行なっていることになるのである。

なおここで残された一つの問題としては、新潟・山形地方のシュウトノツトメにおいては、若夫婦が連れだつて嫁の生家を訪れ、夜は嫁家に帰つてともに眠るのであるから、一時的にも夫婦が分断されるという形式はとらない。しかし北陸や若狭の長期かつ頻繁な里帰り慣行においては、嫁が生家にいる間に嫁の妻問いが行なわれるという報告が皆無である以上、実質的に一年の相当期間、夫婦が分断された生活を送ることになる。しかも年齢が若い程、嫁の里帰りの頻度や期間が多く長いというのであるから、これは現実問題として夫婦間の意志の疎通や、特に性の問題において大きな弊害とならう。中込も述べているように、⁽³⁸⁾このような問題に端を発した、地元青年会や婦人会による、里帰り慣行の廃止運動が実際に起きているという実態を考慮すれば、そのような「家」主体ともいえる民俗慣行を長く存続させてきた背景にある社会構造と、新潟・山形地方のシュウトノツトメ慣行の背景にある社会構造とを、単に民俗慣行の構造的解釈から同一の範疇で捉えることには問題があるのかもしれない。これは一つの婚姻習俗や慣行を考へる場合、その背景にある「家意識」を含む社会構造をいかに考慮し、いかに解釈するかという大きな問題に繋がるものと思われる。

さらに、嫁家から嫁家に対する頻繁なツケトドケで有名な北陸地方の婚姻も、一見は嫁家中心的な家父長制的嫁入婚のように思われがちであるが、別の側面から見れば、嫁家へのツケトドケは、結果として嫁とその子を嫁家の大きな影響下に置くことに対する代償の役割を果たしているとも考えられる。それは一地域において、ある習俗が長い期間連続してゆく間に、本来の目的や意味とは異なる価値が付加された結果であるかもしれない。しかし今日、これらの地方から他地域へ婚出した女性が、ことあるたびに子を連れて長期の里帰りを行なっていることから、外孫に対

して嫁家が必然的に大きな影響力をもつことになる。このような関係は、嫁の母親が死亡するまで続けられるのが通例で、その意味においては、嫁のみならずその子までも、相当長期間にわたって、婚家と生家いずれにも完全には帰属しない、流動的な立場を維持していたことがわかる。ここでは、婚家より嫁の生家の方が、子供に対して日常的な様々な影響力を持つ場合も十分にありえたのであろう。

第二に、妻間い婚存続の背景として、従来から指摘されてきた、嫁の労働力を少しでも自家に引き留めておこうとする嫁家の要求や、隠居慣行に代表されるような、親子二世代の夫婦が同居を避けようとする意識のような、いわゆる経済的・家族制的要求の他に、幾つかの段階を経て、嫁を徐々に嫁家に接近させようとする潜在的意識が存在し、その期間、嫁の妻間いが行なわれている例が見られることである。これは⑤の「同居型一時的妻間い婚」の中に看取できる。たとえば奄美の沖永良部島では、デイーとよばれる儀礼によって嫁の妻間いが始まるが、その後ニーピチとよばれる嫁の嫁家への引き移りまでに、ヤーミシという儀礼が行なわれ、これを機に嫁は毎朝夕嫁家の水汲みに訪れるようになる。⁽³⁹⁾このことは、ヤーミシによって、嫁が公的な目的のために嫁家への出入りを始めたことを意味し、換言すれば、嫁は生家の家族から一段階離れて、嫁家の家族に一段階接近したことを示しているといえよう。このような中間的段階を経ながら、嫁は徐々に嫁家の家族として定着してゆくのである。これは婚姻による家族構成員の移動によって生じる、様々な緊張関係を緩和させる機能を有しているとも考えられるのである。

第三に、⑥・⑦の「同居型一時的妻間い婚」において、寝宿が当面の婚舎にあてられる例では、いわゆる「家」を離れた場所で夫婦生活が営まれるという、特殊な婚姻の形態が見られる。これは既述のシュウトノツトメやセンタクガエリの場合と同様に、婚姻後ある一定期間は、若夫婦は嫁・嫁どちらの「家」にも帰属することなく、いわば「家」を離れた立場をとるといいう、日本の家族慣行の一つの特質を示唆しているように思われる。そして、これは清水のいうような若夫婦の「両属」⁽⁴⁰⁾、筆者のいう「流動的」な立場に相應するものといえよう。

五 婚姻類型と家族類型の相関性をめぐって

本節では前節までで論じてきた婚姻の諸類型と、そこから見た家族の特質を前提とし、婚姻類型と家族類型との相関性について考えてみたい。

日本の家族に関する研究は、戦前より社会学・民俗学・人類学などのそれぞれの立場から盛んに行なわれてきた。その中では、日本家族の理解のための方法と視点をめぐって、様々な議論が展開されてきた。ただしその詳細をここで逐一検討することは、決して筆者の意図する所ではないし、また論旨をあえて煩雑にしかねないように思う。よって、ここでは婚姻の構造と直接関わりがあると考えられる、家族の構造に基づく類型論をめぐる議論を絞って論を進めたいと思う。

家族の構造をめぐる研究は、戸田貞三による現実の家族の実態把握を中心とした一連の研究に始まり、その後多くの研究者がそれぞれの視点より家族の類型化を行なってきた。たとえば農村社会学の立場から独自の研究視角を示した鈴木栄太郎による、夫婦家族・直系家族・同族家族の三類型論⁽⁴²⁾や、小山隆による、夫婦家族・直系家族・傍系家族の三類型論⁽⁴³⁾、さらに民俗学の立場では大間知篤三による、単世帯家族・複世帯家族の二類型論⁽⁴⁴⁾、社会人類学の立場では蒲生正男の拡大型家族・直系型家族・核心型家族の三類型論⁽⁴⁵⁾など、様々な学説が見られる。近年では、それら先学の業績を踏まえつつ、隠居慣行・相続形態・分家慣行・祖先祭祀・祖名継承法などの綿密な分析を行なった上で、家族の構造分析のためには「家族成員間の力学的構造と祖先祭祀の両面からのアプローチが必要である」ことを主張した上野和男の学説が注目される。上野はかつてより、日本の諸地域で見られる様々な家族の形態を同質的ではなく、地域的なヴァリエーションとして捉えんとした大間知篤三や、家族構成を指標とした類型論以外に、家族の内部構造をも指標に含めた類型論を提唱した蒲生正男の学説を評価しつつ、持論の構築を進めてきた研究者である。上野は家

族の力学的構造を「家族内における親子関係・兄弟姉妹関係・夫婦関係のうちいずれがより尊重されているかの分析がここでの中心的な問題である」⁽⁴⁷⁾として、まず「親子中心型家族」と「夫婦中心型家族」の二類型に分類した。そして前者においては兄弟姉妹関係の強調の程度を基準として、下位類型としての「拡大型家族」と「直系型家族」を設定し、後者においては「隠居制にもついで夫婦関係を強調している家族の他に、新婚夫婦による新家族形成にもついで夫婦関係を強調している家族もある」⁽⁴⁸⁾ことから、その下位類型として「隠居型家族」と「核心型家族」を設定している。さらに位牌祭祀と祖名継承法の分析より、父―息子の関係をより強調する形態の家族を「父性家族」とよび、父―息子の関係と同様に父―娘の関係を強調する家族を「双性家族」とよぶ、いわゆる二類型を設定した。そしてこのようなふたつの視点による分析を総括して、結果的に「親子中心型家族―拡大型」・「親子中心型家族―直系型」・「夫婦中心型家族―隠居型」・「夫婦中心型家族―核心型」の四類型論を提示した。このような上野の類型論を筆者が特に評価するのは、第一には、日本の家族構造の多様性を、単一の構造的特質のものと捉えるのではなく、その変差をあくまで異質な形態として「多元的・類型的」に捉えたことと、第二に、日本の家族を、可視的な家族構成員の形態やいわゆる「家制度」との関連においてのみならず、位牌祭祀の形態や祖名継承法などの、家族の内的特質や潜在的指向性をも含めた全体的構造として捉えんとしたことによる。家族をいわゆる日本的な「家」と区別し、家族そのものの構造と特質を抽出する必要性は、かつてから提唱されてはいるが、その外的・内的両面からの構造分析によって、家族類型論を構築した所に上野の研究の意義が認められるのではないかと筆者は考える。そこで、本論では筆者が提示した九つの婚姻類型と、上野が提示した四つの家族類型の相関性について考えてみたいと思う。

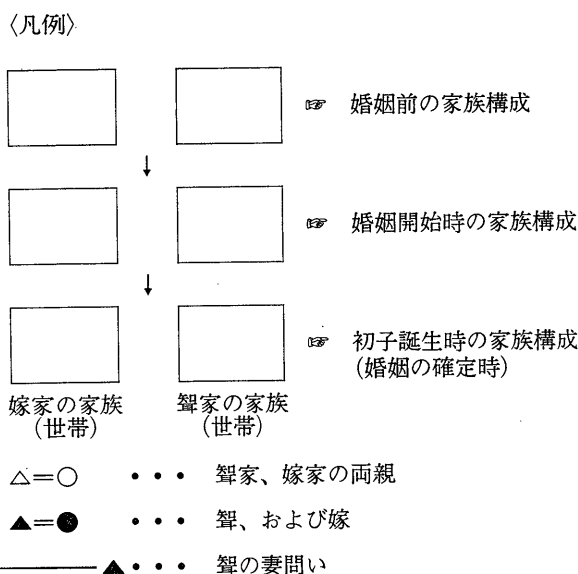
上野のいう「親子中心型家族」は、婚姻においては婚舎の移動が認められるものであれ、認められないものであれ、最終的には二世代の夫婦が同居してひとつの世帯を構成する形をとる所に特色がある。すなわち隠居慣行を伴わない家族であり、そのような婚姻形態を指す。よって筆者の婚姻類型と照合すれば、聶の妻問いの慣行を伴い、よって婚

婚出者	夫婦同居・別居	生家への依存	婚舎の移動	有無 隠居制の	そ の 他	婚姻類型	家族類型
女 性	同 居	強	有	隠居	嫁家中心型	⑥ ➡	(C)
				隠居	贅家中心型	⑦ ➡	(C)
			同居	⑤ ➡		(B)	
		無	隠居	③ ➡		(C)	
			同居	② ➡		(B)	
				① ➡		(A・B)	
男 性		弱			⑨ ➡		(B)
	別居				⑧ ➡		(A)
両	同居				④ ➡		(D)
☆ 家族類型（上野、1984より）							
<div><div><div>親子中心型家族</div><div>夫婦中心型家族</div></div><div><div>拡大型👉 (A)</div><div>直系型👉 (B)</div><div>隠居型👉 (C)</div><div>核心型👉 (D)</div></div></div>							

〔図3〕 婚姻類型と家族類型との相関性

舎の移動が見られるものとして⑤の「同居型一時的妻問い婚」が、婚舎の移動が見られないものとしては①の「一般型嫁入婚」および特殊な形態ではあるが⑧の「終生妻問い婚」と⑨の「同居型贅養子取り婚」が相当することになる。その中で「同居型一時的妻問い婚」と「同居型贅養子取り婚」では、一子残留による家の継承が基本とされていることから、「親子中心型家族：直系型」に相応すると考えられるが、「一般型嫁入婚」においては、基本的には一子残留による直系家族を構成することが多い

が、地域によっては傍系親族や非親族をも家の内部に吸収せんとする指向がうかがえる場合もあり、いわば「直系型」と「拡大型」の両種が想定できるというよう。なお、白川村の長男とその嫁になる女性以外の者のみにおいて見られた〈終生妻問い婚〉は、形式上は複数の未婚の母親とその子が同居するという特異な形態を呈するが、その背景には多子残留による大家族が存在することからも、「拡大型」に属するものと見做すことができよう。



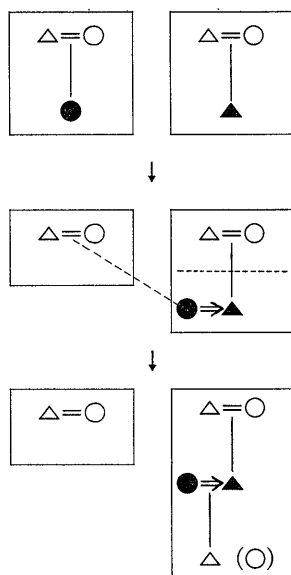
〔図4〕 婚姻類型による家族構成のモデルと世帯

一方「夫嫁中心型家族」は、親子の関係よりも夫婦の関係が重視される家族形態で、伝統的な民俗社会においては隠居慣行を伴うケースが多い。それが上野のいう「隠居型」の家族である。しかし一方で、子供たちの内で誰も家に止まらないような、いわば「家」の継承に対する意識がきわめて希薄な家族も存在する。それは昭和以後、特に戦後になって普及した現代的な都市型の家族であり、筆者のいう④の〈別世帯型嫁入婚〉に相当する。ただし上野のこれまでの研究によれば、伝統的な民俗社会においても、特に奄美地方において、このような形態の家族が見られるという。しかしいずれにしても、このような家族においては「家意識」がきわめて希薄であり、かつその存続を希求する指向が積極的に見い出せないという点において、他の家族類型や婚姻類型とは質的に一線を画しているとい

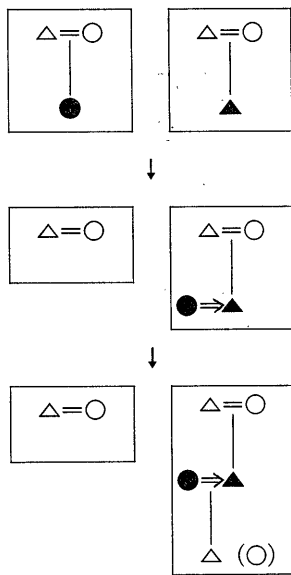
えよう。

以上の、婚姻類型と家族類型との関連性を示したのが〔図3〕である。ただし、婚姻類型を家族の構造との関連において分析する場合、双方を比較対象としての並列的な関係要素として捉えることができないということを確認しておかねばなるまい。つまり婚姻とは、制度・習俗・慣行・行為・関係性・権利などを包含する社会的事象であって、

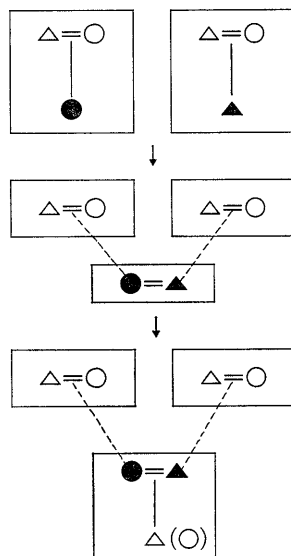
② 変則型嫁入婚・同居型



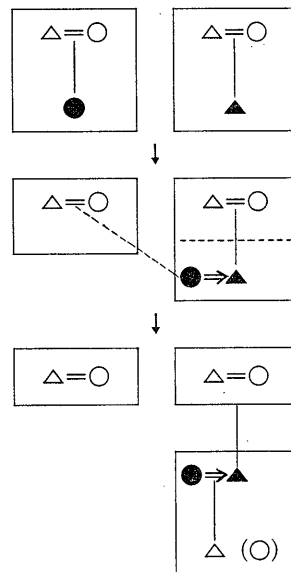
① 一般型嫁入婚



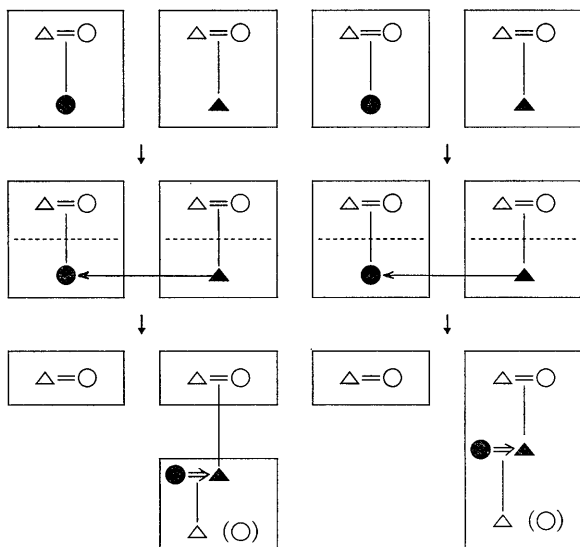
④ 別世帯型嫁入婚



③ 変則型嫁入婚・隠居型

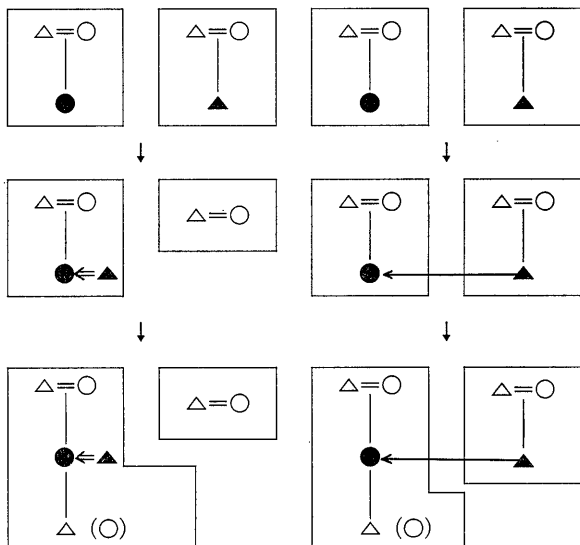


⑥・⑦ 隠居型一時的妻問い婚 (嫁家中心型・娼家中心型) ⑤ 同居型一時的妻問い婚



⑨ 同居型娼養子取り婚

⑧ 終生妻問い婚



そこには「家族」という集団も当然含まれるものではあるが、一方で、家族を社会的な人間相互の紐帯として捉え、その形態のみならず、内部における潜在的意識や時間的連続性をもつ指向性や家族イデオロギーまでも含めるとすれば、当然その中に「婚姻」という事象も包含されることになる。よって両者の連関性は常に相互的に作用しあう関係にあるものと見做すべきであろう。とすれば、婚姻類型と家族類型の相関性においても、並列的・直線的な対応を示

すものではなく、あくまで相互連関の可能性を示す一つの指標として解釈すべきであることが理解できよう。

なお「図4」に、筆者があげた各婚姻類型による、嫁家および嫁家の世帯と家族構成が、婚姻の進行に伴ってどのように変化するかを、モデル化して示したので参照されたい。

六 結語——民俗学における婚姻・家族研究の将来に向けて

坪井洋文も指摘しているように、⁽⁴⁹⁾「儀礼」とは「人間以外の世界に何ものかが存在し、現世に生きる人間に対して、その人間の幸福や欲求の充足に影響を与えているという超自然観が前提となつて成立するものである」ことは、これまでの民俗学においては周知のことであつた。ゆえに通過儀礼においても、その面が重視され、これまでに膨大な業績と成果を残してきた。それは大いに評価されうるものであろう。しかし一方で「儀礼」自体の意味論やその歴史的変遷をめぐる議論が強調されすぎたために、儀礼を取り巻く人間相互の関係性やそれを支える社会そのものの分析がどうしても疎かにされてきたように思われる。

筆者はこれまで、大間知篤三の婚姻と家族を対象とした研究に刺激されつつ、婚姻の実態把握とそれをめぐる社会構造の民俗学的な解明をめざして研究を進めてきたつもりである。その結果、婚姻の問題を考える場合、いわゆる婚姻儀礼そのもののだけを対象としていたのでは、決して発展的ではないことを痛感した。つまり通過儀礼全体の中に婚姻を位置づけ、さらに婚姻を家や家族、さらに他の種々の社会組織との関連において捉えることが必須であることを感じてきたのである。そのような視点に基づいて、婚姻の構造的理解と家族との相関性を浮き彫りにするために試みたアプローチの過程が本小論の内容である。そこではまず、従来の民俗学の「歴史指向」ともいうべき基本的研究視角を一旦取り払い、婚姻と家族の構造について、外的・内的両面から検討した。さらにその実態を把握することがますます必要であるとの考えに基づき、歴史的変遷過程を示す目的で構築された従来の婚姻類型論に替わって、新たな類型

論を構築し、それを家族類型論と照合する作業を試みた。その作業を通じて、日本の婚姻と家族の構造的特質を抽出してきたつもりである。しかし結果は、先学のあまりにも偉大な業績の要点整理と、今後これらの相互連関を考える場合の、ひとつの指標を提示するのみで終ってしまったようにも思う。いささか後悔の念は残るが、ひとまず問題点の指摘と今後の方向性を示唆することだけは成し得たのではないかと思う。

そこで最後に、民俗学における婚姻や家族の研究の将来に向けて、今後の方向性について、筆者自身の反省と抱負を含めつつ、若干言及しておきたいと考える。

第一に研究視角においては、習俗や慣行を支える地域社会そのものの分析をもっと積極的に進めるべきであると思う。習俗や慣行の地域的分布や歴史の意味を追求することも確かに有効ではあるが、まず習俗・慣行の地域的存在形態を明確に把握する作業をもっと押し進めるべきである。いうならば、背景としての地域社会を重視した個別研究を推進すべきであるということである。それが成し得れば、習俗・慣行の構造分析はもとより、他地域との比較研究や、文献を用いた歴史的視座に立つての比較研究も、より有効性を増すものと思われる。特に近世・近代における近似した家族慣行や婚姻習俗と現行の民俗事象とを、同一地域の村落組織や家の構造との関連で比較し、地域における存在形態と、その変遷の過程を解明することは、民俗学の独自性を生かした、オリジナルな研究領域になりえよう。そのためには、あくまでも対象たる地域の種々の社会構造との関連において、婚姻や家族の習俗・慣行を捉えてゆく研究視角が必要であることを再度強調しておきたい。

さらにひとつの習俗や慣行を存続させ、または変容させる要因としての、当該地域の人々の生活環境や素朴な感情も決して無視してはならないであろう。特に婚姻や家族の問題には、人々の日常生活に根ざした潜在的意識が反映されやすい。環境や生活様式の変化に伴って、時には伝統的な制度としての慣行や習俗と、人々の卒直な欲求とが拮抗し、種々の葛藤を生じるケースも多い。そのような現実をも視野に入れながら、対象としての事象を広く捉えてゆか

ねばならないであろう。このような視点を持つことによって、きわめて多様化した現代家族や婚姻の問題について、民俗学独自の解釈やアプローチを試みることも可能ならしめるのではないかと思われる。

第二に研究領域においては、婚姻や家族の問題を、これまで膨大な業績を積み重ねてきた、民俗学の「家」研究の成果を生かしつつ、同族を含めた、複雑な構造を持つ日本の種々の親族集団の問題、分牌祭祀・位牌分け・墓制・半檀家制などの習俗を含めた祖先祭祀の問題、さらに婚姻や家族と密接な関連を持つ種々の年齢集団の構造や機能などを対象とした考察・分析を並行して進めながら、婚姻や家族の問題を巨視的に捉えてゆくことが必要であろうと考える。これらの領域は、決して民俗学独自の研究対象ではなく、近年は主として社会人類学において活発な研究がなされている。実際に社会人類学の研究者と民俗学の研究者が共同で貴重な成果をあげている例は少なくないし、また研究者自体も不可分の関係にあるケースが多い。国外を対象とする場合はさておき、日本国内を対象とした、特に村落や家族などを対象とする社会伝承研究においては、民俗学独自の研究姿勢や特質を模索してゆくためにも、その研究視角や方法において、今後民俗学と社会人類学とのますますの接近が図られるべきであろうと思う。

終始舌足らずな論述で、当初意図していた目的を達成するまでには到底至らなかったようにも思う。いささか心残りではあるが、本小論で浮き彫りにされた数多くの問題について、今後多方面からのアプローチが試みられることを希望しつつ、筆者自身、諸学兄からの多くの批判と助言を得て、今後の研究に繋げてゆきたいと考えている。

註

- (1) 「簞入考」ははじめ『三宅博士古稀記念論文集』に収録され、「史学対民俗学の一課題」という副題がつけられていた。(柳田一九二九)
- (2) 瀬川一九七一および一九七二
- (3) 大間知・柳田一九三七
- (4) 大間知一九五〇bおよび一九五〇c
- (5) 大間知一九五三および一九六六
- (6) 大間知一九五〇c
- (7) 上野一九八〇
- (8) 有賀一九四三および一九四八
- (9) 八木一九八七b

- (10) 江守一九八六
- (11) 大間知一九三七・天野一九七九
- (12) 八木一九八七a
- (13) 蒲生一九六〇・坪井一九八三
- (14) 清水一九八七・中込一九八七
- (15) 清水一九八七、一八四頁
- (16) たとえば「足入れ婚」とは、類型としては伊豆諸島において見られる、聳の妻問いを伴い、当面の婚舎は嫁家に置かれるという形式の婚姻であるが、このような婚姻と、近畿や北陸を含めた広い地域に分布している、特別な事情によつて婚礼を行わずに、嫁を聳家に引き移すような特例的な婚姻や、東北を中心とする地域において見られたような、嫁との相性や人柄を試す目的で、一旦嫁を聳家で生活させるような婚姻も、*クアシイレ* という名称の儀礼や習俗を伴うゆえに、同一の婚姻類型に含めてしまうような例は決して少なくない。(八木一九八一参照)
- (17) 清水一九八七、一八一頁
- (18) 八木一九八六、四九頁
- (19) 大間知一九三七、一九五〇cおよび一九五八bなどを参照のこと。
- (20) 大間知・柳田一九三七、瀬川一九五七、土田一九六四、長谷川一九七三および中込一九八七など
- (21) 大間知一九五〇c、四四一頁〜四四九頁
- (22) 佐藤一九五六
- (23) 上野一九八四、四三九ページ。なお上野はこのような奄美の家族構造の特質について、「奄美の社会構造」の中で詳しく紹介している。(上野一九八三)
- (24) 家島の婚姻については、西谷一九五〇、八木一九九〇を参照のこと。また沖永良部の婚姻については、柏一九四四、八木一九八六を参照のこと。
- (25) 大間知一九五〇a、八木一九八一などを参照のこと。
- (26) 大間知一九五〇bを参照のこと。
- (27) 江馬一九七五、大間知一九五八aなどを参照のこと。
- (28) 八木一九七九、一七頁および八木一九八一、八五頁参照のこと。
- (29) 佐藤一九五六を参照のこと。
- (30) 清水一九八七、一八七頁
- (31) 清水一九八七、一八八〜一八九頁
- (32) 清水一九八七、一九〇〜一九一頁
- (33) 清水一九八七、一九三頁
- (34) 中込一九八七、五二頁
- (35) 八木一九八七、一三三〜一三五頁
- (36) 大間知一九五三を参照のこと。
- (37) 清水一九八七、一八四頁
- (38) 中込一九八七、五四頁
- (39) 八木一九八六、四五頁
- (40) 清水一九八七、一八九頁
- (41) 戸田一九二六、一九三四および一九三七など。

(42) 鈴木一九四〇

(43) 小山一九五九

(44) 大間知一九五〇dおよび一九五八a

(45) 蒲生一九六六および一九七〇

(46) 上野一九八四、四二六頁

(47) 上野一九八四、四二六頁

(48) 上野一九八四、四二六頁

(49) 坪井一九八四、四六五頁

《参照文献一覽》

天野 武

一九七九 「嫁入り婚における初簪入りの意義」(『民俗論叢』創刊号 相模民俗学会)

有賀喜左衛門

一九四三 『日本家族制度と小作制度』 河出書房(同著作集第一卷・第二卷所収)

一九四八 『日本婚姻史論』 日光書院(同著作集第六卷所収)

江馬三枝子

一九七五 『飛騨白川村』 未来社

江守五夫

一九八六 『日本の婚姻——その歴史と民俗』 弘文堂

長谷川昭彦

一九七三 「嫁の里帰り慣行」(『むらの家族』ミネルヴァ書

蒲生正男

一九六〇 『日本人の生活構造序説』 誠信書房

一九七〇 「日本の伝統的家族の一考察」(岡正雄教授古希記念論文集刊行会編『民族学からみた日本』 河出書房新社)

柏 常秋

一九四四 『沖永良部島民俗誌』 凌霄文庫刊行会

小山 隆

一九五九 「家族形態の類別」(『新明正道博士還暦記念論文集』『社会学の問題と方法』 有斐閣)

中込睦子

一九八七 「若狭地方における嫁の里帰りと家族の構造」(『史潮』第二一号)

西谷勝也

一九五〇 「播磨家島の簪入婚」(『民間伝承』第一四—二一号)

大間知篤三

一九三七 「民間伝承と伝統——婚姻形式を対象として」(『思想』第一七九号、同著作集第二卷所収)

一九五〇a 「利島の足入れ婚」(『民族学研究』第一四—三

号、同著作集第五卷所収)

一九五〇b 「寝宿婚の一問題」(『民間伝承』第一四—三

号、同著作集第二卷所収)

一九五〇c 「足入れ婚とその周辺」(『民俗学研究』第一号、同著作集第二卷所収)

一九五〇d 「家の類型」(『民間伝承』第一四—二二号、同著作集第一卷所収)

一九五三 「対馬のテボカライ嫁」(『日本民俗学』第一号、同著作集第二卷所収)

一九五八a 「家族」(『日本民俗学大系』第三卷、同著作集第一卷所収)

一九五八b 「婚姻」(『日本民俗学大系』第三卷、同著作集第二卷所収)

「富山県下の婚姻習俗——ツケトドケとウツチャゲ」(『民間伝承』第三〇—二二号、同著作集第二卷所収)

「羽越国境地方の婚姻制——シュウトノツトメを中心として」(『日本民俗学』第三—四号)

「婚姻覚書」 講談社

「若者と娘をめぐる民俗」 未来社

「家・身体・社会」 弘文堂

「日本農村社会学原理」 日本評論社

戸田貞三

一九二六 「家族の研究」 弘文堂書房

一九三四 「家族と婚姻」 中文館書店

一九三七 「家族構成」 弘文堂

坪井洋文

一九八三 「日本海沿岸諸村における婚姻儀礼の類型性——江守五夫仮説に寄せて」(『家族史研究』第七卷)

一九八四 「ムラ社会と通過儀礼」(『日本民俗文化大系』第八卷・村と村人)

土田英雄

「嫁の定期的里帰り慣行に関する一考察」(『大阪学芸大学紀要』第一三三号)

上野和男

一九八〇 「昭和初期における家族研究の展開——柳田國男と大間知篤三を中心として」(『家族史研究』第一号)

一九八三 「奄美の社会構造」(『現代のエスプリ』第一九四号・奄美の神と村)

一九八四 「家族の構造」(『日本民俗文化大系』第八卷・村と村人)

八木 透

一九七九 「婚姻類型の研究——足入れ婚を中心として」(『近畿民俗』第七八号)

一九八一 「足入れ婚と隠居復世帯制」(『季刊人類学』第一二—四号)

佐藤光民

瀬川清子

一九七二

一九七二

清水昭俊

一九八七

鈴木栄太郎

一九四一

戸田貞三

一九八六 「民俗学における婚姻研究の課題——新しい婚姻

類型論構築に向けて」(『京都民俗』第四号)

一九八七a 「書評・江守五夫著『日本の婚姻——その歴史

と民俗』(『日本民俗学』第一六九号)

一九八七b 「寝宿婚と婚舎をめぐる民俗研究——大間知・

有賀論争の再検討」(『鷹陵史学』第二三三号)

一九九〇 「家島の兄弟分償行と妻問い婚」(『民俗学の進展

と課題』、国書刊行会)

柳田國男

一九二九

「聲入考——史学対民俗学の一課題」(『三宅博士
古希記念論文集』、定本柳田國男集第一五卷所収)

〈追記〉

本小論執筆のもととのきっかけは、一九八六年十月に関西
大学で行なわれた、日本民俗学会第三十八回年会における「儀

礼・祖先・家族——新しい族制研究にむけて」と題するシンポ
ジウムである。そこで筆者が「婚姻と家族」のタイトルで報
告をした内容が、本論の基礎となっている。それから九四年が
経過し、この問題に対する筆者自身の考えや研究の方向性も若
干変化し、その結果、内容的には当時の報告とは異なる部分も
多くなってしまった。しかし根幹となる問題意識は変わってい
ないつもりである。

学会のシンポジウムで報告の機会を与えて下さった実行委
員の諸先生方と、シンポジウムの企画から運営において多大
な協力と、筆者の報告について非常に有益なアドバイスを下
さった竹田旦先生、上野和男先生、波平恵美子先生、原泰根先
生、その他の大勢の方々に対して、遅れ馳せながら、ここに心
からの謝意を申し述べたい。

(一九九〇年十月二〇日脱稿)

